

17世紀ハプスブルク家における婚姻政策の交渉過程と婚姻儀礼 —スペイン宮廷における一事例について—

小野寺 華子

El proceso de negociación matrimonial y la ceremonia del matrimonio de la casa de Habsburgo en el siglo XVII en la corte de Madrid

Durante los siglos XVI y XVII, las dos ramas de la casa de Habsburgo—la española y la austríaca— se unieron políticamente a través de matrimonios mutuos. Este artículo trata sobre la negociación matrimonial del matrimonio del emperador Leopoldo I con Margarita Teresa de Austria, hija de Felipe IV, con el uso del diario del conde de Pötting, el embajador del Sacro Imperio en Madrid. El desponsorio y la jornada de Margarita Teresa de Austria se realizaron en 1666, tras repetidos retrasos, dos años y medio después de la firma de las capitulaciones matrimoniales. Este artículo examina la causa de la lentitud en la corte de Madrid en torno a la determinación de la jornada a Viena de Margarita Teresa de Austria.

はじめに

近世期の西ヨーロッパの各王家は、婚姻政策を通じて多かれ少なかれ血縁関係によって繋がっている。16、17世紀にわたって同族結婚を繰り返したスペインとオーストリアの両ハプスブルク家は、その代表的な例である。神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世 Maximilian I (1459年生-1519年没)の息子フィリップとカトリック両王¹の娘ファナとの間の嫡男は、カルロス1世 Carlos I (1500年生-1558年没)としてスペインをハプスブルク家の支配下におさめ、カール5世 Karl Vとして神聖ローマ皇帝位を受け継いだ。彼の引退後、同家は、嫡男フェリペに受け継がれたスペイン・ハプスブルク家と弟フェルディナントに受け継がれたオーストリア・ハプスブルク家に分派した。1700年にスペイン・ハプスブルク家が断絶するまでの200年間、歴代のスペイン王の母后はオーストリア・ハプスブルク家の出自であり、婚姻政策を通して政治的連携の維持に努めていた。本稿では17世紀後半に執り行われた、神聖ローマ皇帝レオポルド1世 Leopold I (1640年生-1705年没)と彼の姪にあたるスペイン王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリア Margarita Teresa de Austria (1651年生-1673年没)の婚姻が成立するまでの過程について取り扱う。

M.ミリアンの監修による研究集録²の中には、ハプスブルク両家の婚姻に関連した先行研究がいくつか存在する。王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアのヴィーンへの興入れに伴う奉公人の編成についての研究³では、奉公人の選定やヴィーンへの興入れに際しての支出について記されている。ヴィーン宮廷における皇妃マルガレーテ(スペイン王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリア)についての研究⁴では、オーストリアへの興入れからヴィーン

での宮廷生活について記述されている。17世紀の両ハプスブルク家出身の王妃・皇妃の輿入れに随行した奉公人についての研究⁵では、フェリペ3世の娘マリア・アナ・デ・アウストリア María Ana de Austria がオーストリアに輿入れした際に同行した随員が、その娘マリア・アンナ・フォン・エスターライヒ Maria Anna von Österreich の輿入れの際に帰国し、そのままスペイン宮廷で仕えていた役職者がその娘マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアのオーストリアへの輿入れに随行し、母娘3世代の輿入れに際しての随員の大部分はドイツ語圏出身ではなく、スペイン語圏出身であったことが述べられている。

オーストリア宮廷から見たスペインのイメージについての研究⁶では、王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアと共にスペイン宮廷から同行した女官たちの不遜さや、王女の輿入れの度重なる延期によるスペイン宮廷の“冗長”や“遅さ”といったスペインのイメージが、オーストリア宮廷に定着していったことが記されている。

本稿では、レオポルド1世とマルガリータ・テレサ・デ・アウストリアの婚姻について、神聖ローマ帝国の大使としてスペインに着任したペッティング伯爵 Graf von Pötting (1627年生-1678年没)の日記⁷を通して、王女のヴィーンへの出発の日程が決定するまでの過程と婚姻に関連してスペイン宮廷にて執り行われた儀礼について取り上げ、王女の輿入れの度重なる延期の背景にあったスペイン宮廷の“遅さ”の要因について検討していく。

1. 輿入れに向けての協議の開始

神聖ローマ帝国の大使として、スペイン国王フェリペ4世 Felipe IV (1605年生-1665年没)と1663年4月28日に初めての公的な謁見を果たしたペッティング伯爵は、フェリペ4世とオーストリア・ハプスブルク家出身の王妃マリアナ・デ・アウストリア Mariana de Austria (1634年生-1696年没)⁸の間に生まれた王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアと神聖ローマ皇帝レオポルド1世の婚姻を完遂させる任務を皇帝より任され、1663年12月18日にレオポルド1世と王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアの婚約が締結された。しかしながら、1662年11月から1663年1月の間に、レオポルド1世の弟を含むオーストリア・ハプスブルク家の男性王族が3名亡くなっており、ペッティング伯爵によると、そのような不吉な状況下を危惧したスペイン宮廷では、王女が婚姻を結ぶにはまだ年齢が若すぎるという名目で王女の輿入れを延期し、オーストリアへの輿入れの日程の交渉は難航していた⁹。

1664年3月7日の日記には、「[午後]5時に国王との謁見が行われ、皇帝陛下より婚約者の輿入れの日程の取りまとめる任務を授かったことを、口頭と書面で示した¹⁰」とあるが、スペインへの着任から一年近くが経過してもなお、婚姻の日程の協議にはまだ取り掛かっていないことが見てとれる。3月31日の日記には、「メディーナ[・デ・ラス・トーレス]公爵が午後私を訪ね、皇后様の輿入れの日程についての国王の決定[が書かれた書状]を持ってきた¹¹」と記されており、フェリペ4世は王女のオーストリアへ向けての出発を翌年の4月とする決定を下した¹²。しかしながら王女の輿入れの交渉はその後一向に進むことはなく、7月9日には「我が皇后様の輿入れの日程に関して、とても抑制した調子の書簡を国王に献上した¹³」と記録され

ており、フェリペ4世に状況を確認する書状を送っていることがわかる。10月21日の日記には「王妃と最近の事柄や皇后の興入れの日程について話し合った¹⁴」とあるように、一向に進まない興入れの交渉を円滑に進めるため、オーストリア・ハプスブルク家出身の王妃マリアナ・デ・アウストリアに働きかけている。さらに10月24日には「午後メディーナ〔・デ・ラス・トーレス〕公爵とマジョール通りにある公爵邸で、我が皇后様の興入れの日程に関して長時間にわたって重要な協議を行い、公爵に対して強く心に訴えかけるように話した¹⁵」とあり、スペイン宮廷の重鎮であり親オーストリア派であるメディーナ・デ・ラス・トーレス公爵 Duque de Medina de las Torres に対してさらなる協力を仰いでいる。

神聖ローマ帝国を中心とする連合軍が行っていたオスマントルコとの戦争の終結の知らせが11月2日にペッティング伯爵のもとに届き¹⁶、ハンガリーでの戦闘を理由に王女の興入れの延期を主張していたスペイン宮廷の大義名分が無くなった。さらに11月13日にペッティング伯爵のもとに届いた神聖ローマ皇帝の書状には、フランスのスペイン王位への野望を防ぐためには王女の興入れは必要不可欠であると記されており¹⁷、その書状をもとにスペイン宮廷での説得を図った。フェリペ4世の長女、マリア・テレサ・デ・アウストリア María Teresa de Austria はスペインの王位継承権を放棄した後、フランス王ルイ14世 Louis XIV の王妃となっているが、王位継承権放棄の条件であるフランスへの持参金の支払いがスペインの財政難により滞っているため、老齢のフェリペ4世と虚弱体質な嫡男カルロスが逝去した場合には、スペイン王位を主張する可能性があり、それを防ぐための措置であったといえる。

11月15日の日記には「午後5時から王妃と長時間にわたって謁見を行い、帝室への興入れの日程に関する〔皇帝陛下の〕書状に書かれていた内容を詳細に説明し、協力するよう、わが皇帝の指示のもと、王妃を説得した。謁見の後、メディーナ〔・デ・ラス・トーレス〕公爵の執務室に赴いて同じ議題について長時間協議し、皇帝の書状を渡した¹⁸」と記されている。11月20日には「午後3時から国王に長時間にわたって個別の謁見を賜り、4月に予定されているわが皇妃様の〔代理結婚式やスペインからの出国の〕正確な日程について、わが皇帝が書状にて私に委託した内容を説明し、それについてまとめた文書を国王に丁重に献上した。謁見の後、ルイス・デ・オジャングレン卿¹⁹に同じ内容のことを説明するために、秘書官たちの執務室に文書を渡しに赴いた²⁰」とある。このように、フェリペ4世、王妃マリアナ・デ・アウストリア、メディーナ・デ・ラス・トーレス公爵、ルイス・デ・オジャングレン卿 Don Luis de Oyanguren の四者を説得することによって、興入れの交渉の促進を図ろうとするペッティング伯爵の意図が見てとれる。その一方で、11月21日に、スペイン宮廷において影響力があり、なおかつ反オーストリア派でフランスとの接近を望むベニャランダ伯爵 Conde de Peñaranda が、ナポリ副王の任務を終え、スペインに帰国した²¹。ベニャランダ伯爵はかねてから王女のヴィーンへの興入れに反対の立場を示しており、ペッティング伯爵が面会を申し入れても門前払いされる有様であり²²、王女の興入れについての交渉は再び難航することとなった。

年が明けて1665年に入ると、1月18日の記録には「国王は皇后様への随行としてカルドナ公爵を任命した²³」と記されているように、オーストリア宮廷に随行する人員の選定が進められた。さらに3月22日には「あちら〔王宮〕でメディーナ〔・デ・ラス・トーレス〕公爵と共に初めてベニャランダ伯爵と会談した²⁴」とあるように、メディーナ・デ・ラス・トーレス公爵

の仲介で、反オーストリアの立場を示しているペニャランダ伯爵との初めての会談が実現した。4月6日には「メディーナ〔・デ・ラス・トーレス〕公爵が、わが皇妃様の〔代理結婚式の〕日程を8月とする国王陛下の決定を知らせた²⁵」とあり、1665年4月に設定されていた日程が8月に延期されることとなった。しかしながら7月に入っても具体的な決定はなく、7月14日にはベッティング伯爵のもとに、オーストリア・ハプスブルク家の分家であるチロル・ハプスブルク家の当主が嗣子を残さずに死去したとの知らせが届いた。その日の日記には、「午後〔メディーナ・デ・ラス・トーレス〕公爵に会うために、レティーロ〔王宮〕のサン・ファン礼拝堂に赴き、その知らせを伝え、それにより皇后陛下の輿入れの日程を急がせる必要性について伝えた²⁶」とあるように、チロル・ハプスブルク家の当主の逝去に伴い、オーストリア・ハプスブルク家の男性王族はレオポルド1世を残していなくなり、跡継ぎの確保が急務となったため、翌日には国王と王妃のもとに参向し、「両陛下にインスブルックの大公の逝去のお悔やみを申し上げ、この機会に〔皇后陛下の輿入れの〕日程について、新たにより一層の懇願をした²⁷」。

7月19日の日記には、「午後ニタルト神父²⁸とリソラ男爵²⁹が会いに来た。我々は皇后陛下の輿入れの日程について長時間にわたって会議を行い、ここ〔スペイン〕では何か月も〔交渉の進展が〕止まっているゆえ、どのように皇帝陛下に返答すればよいか話し合った³⁰」と記されており、本国への説明責任とスペイン宮廷への催促について、オーストリア出身者の内輪で相談している。翌日には「国王陛下に〔皇后陛下の輿入れの〕日程〔の決定〕を急ぐ必要性を、多くの重要な理由と共に述べて、同様のことを一枚の紙にまとめて書面で奏上した³¹」とあり、すぐさま行動に移している。また7月22日には「王妃陛下と日程に関してしっかりと話し合い、王妃陛下にも協力していただくために、一昨日国王陛下に献上した書状の写しを献上した³²」とあるように、王妃に対しても輿入れの実現に向けて協力を願っている。さらに7月29日にオーストリアから届いた神聖ローマ皇帝レオポルド1世の書状には、改めてオーストリア・ハプスブルク家存続の危機の状態にあり、一刻も早い輿入れが求められており、それが叶わない場合には、スペイン・ハプスブルク家への金銭的な援助の停止も示唆されていた³³。すぐさま同日にベッティング伯爵は、「午後5時に国王陛下と会談するために〔王宮に〕赴き、我が皇帝のこの目的のための書状を献上したが、それに先立って王妃に対しても同じ役目を果たし、いとやんごとなき花嫁の〔オーストリアへの〕出発のための協力を求めた³⁴」。

しかしながら、代理結婚式の日程は予定の8月になっても一向に決定されることは無く、老齢で健康状態が思わしくないフェリペ4世と病弱な幼年の嫡男カルロスのいずれかが逝去した場合には、状況次第ではレオポルド1世が自らマルガリータ・テレサ・デ・アウストリアを迎えにスペインに赴くべきであるとの考えがスペイン宮廷にはあった³⁵。スペイン・ハプスブルク家の男性王族が途絶える可能性は十分にあり、王位継承権を持つマルガリータ・テレサ・デ・アウストリアを国外に嫁がせるよりも、スペインに居を構えることのできる配偶者を選ぶべきであるという意見さえ存在していた³⁶。

2. フェリペ 4 世の崩御と宝飾品の贈呈の儀

一向に進まない輿入れの交渉を推し進めるために、神聖ローマ皇帝のレオポルド 1 世は婚約者であるスペイン王女に婚約の証の宝飾品を贈呈することを決定し、オーストリアから宝飾品を持参したハラッハ伯爵 Graf von Harrach が 8 月 23 日にマドリッドに到着した³⁷。8 月 25 日のペッティング伯爵の日記には、それらの宝飾品を点検したことが記されている。

ハラッハ伯爵が持参した〔皇帝から婚約者への〕宝飾品を拝見した…一つ目はダイヤモンドとルビーととても大きな真珠の宝飾品で、非常に高価なものだった。もう一つは、とても大きなサイズのエメラルドでできていて、皇家の限嗣相続の宝飾品で、10 万ドゥカードの供託金と引き換えに、いとやんごとなき花嫁に貸与される。三つ目の宝飾品は皇帝陛下の肖像画で、大きな様々な種類のダイヤモンドで飾りが施されている。³⁸

9 月 11 日の日記には「メディーナ〔・デ・ラス・トーレス〕公爵が自身の秘書官を通じて、皇后様の代理結婚式の日程が 10 月 10 日と宣言する国王の書状を送ってきた。私はその決定についての感謝を述べるために国王のもとに参向し、皇后陛下の〔輿入れに際しての〕航海についての文書を献上した。また国王は私に対し、代理結婚式の当日、式の最中に、わが皇帝の誓いの言葉を自分で聴くことも宣言した³⁹」と記されている。しかしながら、9 月 13 日からフェリペ 4 世は危篤状態に入り、9 月 17 日に崩御したことにより、10 月の代理結婚式の挙行は困難な状況となった⁴⁰。

幼年のカルロス 2 世 Carlos II (1661 年生-1700 年没) が即位すると、フェリペ 4 世妃マリアナ・デ・アウストリアが摂政を担うことになり、王女のヴィーンへの輿入れの日程の交渉も王妃によって執り成されることとなった。10 月 12 日の日記には「ブラスコ・デ・ロヨラ卿の書状を受け取ったが、それには、皇帝の代理で結婚式を挙行するための委任状を持っているかどうかを、王妃が知りたがっておられるので知りたいと書かれてあった⁴¹」と記されており、その翌日の日記には「ブラスコ・デ・ロヨラ卿と、代理結婚式の日程について会談するために執務室に赴き、昨日の書状の返答として既に 6 ヶ月以上前から代理結婚式を挙行するための委任状を持っていることを伝えた⁴²」とある。10 月 19 日には「皇帝の〔代理〕結婚式の日程についての王妃陛下の決定をブラスコ・デ・ロヨラ卿から知らされたが、それによると 2 月中旬と決められたそうである。何度も約束がなされているが、今回はそれが遂行されることを神に祈る⁴³」と記録されている。

11 月 7 日には宝飾品を持参したハラッハ伯爵をペッティング伯爵が王族に紹介する形で謁見が行われ⁴⁴、この謁見を経てハラッハも宝飾品の贈呈の儀に参加できるようになった。11 月 18 日の日記には、「4 時に王妃陛下に王宮に呼ばれ、我が皇后様に宝飾品を贈呈する必要があると言われた⁴⁵」と記されており、11 月 20 日の記録によると、王妃が二日後の 11 月 22 日に宝飾品の贈呈の儀を執り行う決定を下している⁴⁶。

午後 4 時に王宮においてわが皇帝からわが王妃様へ宝飾品の贈呈の儀が行われた。その儀

礼は以下の手順で行われた。[午後] 3時過ぎ、大使たちの指南役であるアロンソ・デ・パス卿が、国王陛下の馬車2台を伴い、我々を王宮に連れていくために我が家に到着した。一台目の馬車には、私、ハラッハ伯爵、リソラ男爵、オッペルシュトフ伯爵、ツヴァイアー男爵、前記の指南役が乗った。もう一台の国王陛下の馬車がそれに続き、その後方に誰も乗っていない私の予備の馬車が続き、そのあとに、ハラッハ伯爵の行くところに常に差し向ける私の馬車が続き、リソラ男爵の馬車と、もう2台の私の馬車が連なり、全部で7台で、どれも侍従がたくさん乗っていた。王宮に到着し、我々は数多の廷臣とともに王妃の前室に上がった。(…)我々は前室に入ると、王妃を迎え入れて儀式を始めた。王妃は[その時まで]肖像の間にいらっしやり、一方の側には王が、もう一方の側にはわが皇妃様が、メディーナ[・デ・ラス・トーレス]公爵やモンデーハル侯爵とともに控えておられ、大執事のモンタルト公爵もいらっしやった。この方々が王妃と共に[前室に入ってこられ]着席されると、王妃は私に戴帽するようお命じになった。(…)その後ハラッハ伯爵が話し始めた。次に我々は国王陛下に近づき然るべくご挨拶を申し上げ、わが女主人皇妃様の前でも同様にご挨拶申し上げ、ハラッハ伯爵は皇妃様に対し、然るべく主君の意思を述べ伝えたのち、3種類の宝飾品を献上した：[3つのうち]2つは皇家の限嗣相続品で、一つ目はあまりにも大きなサイズの5つのエメラルドで、二つ目はルビーとダイヤモンドでできた薔薇と真珠から成っていて、珍しいので大変高価なものである。3つ目は、[皇妃様]ご自身の財産となるものであるが、わが皇帝の肖像画が付いた大きな箱で、今流行のやり方ですばらしい細工が施された様々な巨大なダイヤモンドがはめ込まれていた。[皇后]陛下はすべて[の宝飾品]を受け取られ、送り主がどなたであるかをよく弁えられた上で、それにふさわしい特別な謝意を表された。我々は[皇后陛下の]両手に接吻をし、[行きと]同じ者たちと共に、同じマジョール通りを通り帰宅した。⁴⁷

フェリペ4世の逝去の影響もあり、宝飾品の贈呈の儀礼を執り行った結果として、代理結婚式やヴィーンへの出立の日程の決定といった具体的な成果が挙げられたわけではなかった。しかしながら、婚約の証として限嗣相続の宝飾品が贈呈されたことは、スペイン宮廷に対して婚約を再確認させる上で意味があったといえよう。

3. 輿入れの出立の日程の最終決定とスペインでの代理結婚式

1666年に入ると、2月の代理結婚式の挙行に向けて準備が進められ、1月1日の日記には「皇后陛下の宝物番兼出納係であるルーカス・コルテス卿が訪ねてきて、輿入れに向けての準備の状況について報告してきた⁴⁸」と記されており、輿入れの準備が順調に進んでいたと見られていたが、オーストリアに赴くために必要なガレー艦隊の準備が滞っていることが、1月27日にペッティング伯爵に知らされた⁴⁹。2月7日の日記には、「[午後]4時に王妃陛下と、代理結婚式の日程とそれに関連する議題について入念に話し合い、書状を献上した。陛下は私に日程は3月15日に定まることを保証した。そうなることを神に祈りたい⁵⁰」とあり、2月の中旬とさ

れた日程が再び延期されることとなった。

ヨーロッパの王族間の国際結婚においては、新婦が祖国を出発する前に祖国にて新郎の代理を立てて結婚式を行う習慣があり、2月17日にペッティング伯爵はレオポルド1世の指示のもと、メディーナ・デ・ラス・トーレス公爵に新郎の代理の役割を依頼した⁵¹。代理結婚式の日とされた3月15日の日記には「[ウィーンへ向けての] 出発は、疑いなく今月末もしくは4月の初めであると王妃陛下は保証された⁵²」と記されており、またもや日程が引き延ばされた。3月15日の時点においても具体的な日程は決まっておらず、最終的に代理結婚式とウィーンへの向けての出発の日程が確定したのは、代理結婚式の一週間前の4月18日であった。4月18日の日記には「絶対に復活祭の日に代理結婚式が行われ、復活祭の週の三日目に[花嫁一行がウィーンへ向けて] 出発するようにすると、王妃陛下は非常に誠意のこもった言葉で宣言した⁵³」と記され、翌日には代理結婚式でレオポルド1世の代わりを務めるメディーナ・デ・ラス・トーレス公爵にも知らされた⁵⁴。一週間の間で婚礼の儀式に関する最終的な準備が進められ、復活祭の祝日にあたる4月25日に代理結婚式が執り行われた。

復活祭の日であり、それゆえ二重に喜ばしい。なぜなら、この日にわが皇帝が、マルガリータ・マリア [・テレサ] 王女殿下と、幸せに結婚されたからである。結婚式は以下のように執り行われた：皇帝陛下の代理人であるメディーナ・デ・ラス・トーレス公爵は、私、スペイン大公たち、大部分の貴族たちを同伴者として邸宅へと招いた。そこで私は4台の馬車と共にあちら[公爵邸]に到着したが、外交団の乗った馬車は[沿道の人々に] それと認識された。というのも、当地の宮廷でかつて見られたことがないほど豪華で美しいものだったからである。その後我々は公爵の邸宅を出発したが、最初に同伴者の貴族たちの馬車が出発し、次にナポリ王国の馬車に乗った公爵が出発した(馬車の形が八角形で良くは見えないが)。我々は次の順番で馬車に座った：新郎役であるメディーナ [・デ・ラス・トーレス] 公爵、私、アルバ公爵の三名が前方に；ベニャランダ伯爵、パストラナ公爵と彼の息子が後方に。公爵の馬車の後ろには、誰も乗っていない私の馬車が続き、皆の拍手喝采を受けながら、その次に公爵の侍従たちの馬車が続き、その後には私の侍従の馬車が続き、その後は他の貴族の侍従の馬車が続いた。馬車の大渋滞とすべての人が絹と張り枠を身にまとい参加したために人の流れが滞ったので、公爵の邸宅から王宮への到着までは1時間半以上かかった。その後、祭服をまとったコロナ枢機卿が、総大司教や聖職者と共に入場し、婚姻の儀が、通常の様式でいつもの質問で執り行われた。儀式が終わると、皇后陛下は王妃に近づき、跪いて手に接吻をし、王妃は皇后陛下を、この上なく気品にあふれて愛情に満ちたやり方で立たせた。[皇后陛下は] 国王にも同じようにされたが、国王は接吻を受けなかった。その後、[皇后陛下は] 上座に座り、メディーナ [・デ・ラス・トーレス] 公爵が手に接吻をし、続いて私も接吻をし、[皇后] 陛下に、我が皇帝陛下の感謝の書状を献上した(その書状では既に我が皇后・新婦と扱われていた)。その後、出席者全員が両陛下の手に接吻をしたが、すべての人が作法を理解しているわけではなかった、ある人は皇后陛下から始め、また別の人は王妃陛下から始めていた。すべてが終わると、メディーナ [・デ・ラス・トーレス] 公爵は私に、互いに労を讃え合おうと言った。⁵⁵

そして、代理結婚式が執り行われた3日後の4月28日にスペイン王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアはヴィーンに向けて出発をした。

皇后陛下の興入れのための旅が始まった最もめでたい日である。それは正午から1時にかけてのことだった。ここまで愛情深い母と娘の別れの光景は見たことがなかった。[皇后]陛下は、王宮から別れを告げるために跣足修道院へ立ち寄り、そこからアトーチャの聖母聖堂に行き、そこでは、この大切な至宝の道中の無事を願ってマドリッド中[の人]が集まっていた。私は、最初の宿泊地であるバルデモロまで、皇后陛下にお仕えし、そこには午後10時に到着した。[皇后陛下が]馬車から降り、宿泊する部屋までお仕えした。⁵⁶

翌日の日記には、「正午に皇后陛下とお別れをし、午後8時にマドリッドに戻った⁵⁷」と記されており、スペインでの代理結婚式の儀礼とヴィーンへの出立に関する大使としてのペッティング伯爵の任務は完了した。

おわりに

本稿では、1663年に神聖ローマ帝国大使としてスペインに着任したペッティング伯爵の日記をもとに、スペイン宮廷におけるマルガリータ・テレサ・デ・アウストリアのヴィーンへの興入れの交渉について見ていった。神聖ローマ皇帝レオポルド1世とスペイン王女マルガリータ・テレサ・デ・アウストリアの婚姻は、同族間の政治的結束を強めるための重要な婚姻政策であったにも関わらず、1663年12月18日に締結された婚約が実際に成立するまでに約2年半という長い年月を要した。神聖ローマ皇帝レオポルド1世の名代であるペッティング伯爵は、王女のヴィーンへの出立を一日でも早く実現させるためにスペイン宮廷内で奔走し、レオポルド1世もまた限嗣相続の宝飾を贈呈することによって王女の興入れの交渉の進展を図ったが、王女のヴィーンへの出立の日程は度々延期され、定まることがなかった。その背景の一つとして、スペイン・ハプスブルク家の王位継承問題が影を落としていた。1665年9月に老齢のフェリペ4世が崩御し、その跡を継いで王位を継承したカルロス2世は幼年で、さらに著しく虚弱体質であった。このような王位の不安定な状態は、スペインの王位継承権を持つマルガリータ・テレサ・デ・アウストリアのヴィーンへの興入れの交渉に対するスペイン宮廷の対応の“遅さ”をもたらした要因の一つであったといえよう。

¹ カスティーリャ女王イサベル1世(1451年生-1504年没)とアラゴン王フェルナンド2世(1452年生-1516年没)。

² Martínez Millán, José, Maçal Lourenço, Maria Paula (Coords.), *Las Relaciones Discretas entre las Monarquías Hispánica y Portuguesa: Las Casas de las Reinas (siglos XV-XIX), vol. I, II, III*, Ediciones Polifemo, Madrid, 2008; Martínez Millán, José, González Cuerva, Rubén (Coords.), *La Dinastía de los*

Austria: Las relaciones entre la Monarquía Católica y el Imperio, vol. I, II, III, Ediciones Polifemo, Madrid, 2011

³ Labrador Arroyo, Félix, “La organización de la Casa de Margarita Teresa de Austria para su jornada al Imperio (1666)” en Martínez Millán, José, Maçal Lourenço, Maria Paula (Coords.), *Las Relaciones Discretas entre las Monarquías Hispánica y Portuguesa: Las Casas de las Reinas (siglos XV-XIX)*, vol. II, Ediciones Polifemo, Madrid, 2008, pp.1221-1266

⁴ Oliván Santaliestra, Laura, “Giovane d’anni ma vecchia di giudizio: La emperatriz Margarita en la corte de Viena” en Martínez Millán, José, González Cuerva, Rubén (Coords.), *La Dinastía de los Austria: Las relaciones entre la Monarquía Católica y el Imperio, vol. II*, Ediciones Polifemo, Madrid, 2011, pp. 837-908

⁵ Novo Zaballos, José Rufino, “Relaciones entre las cortes de Madrid y Viena durante el siglo XVII a través de los servidores de las reinas” en Martínez Millán, José, González Cuerva, Rubén (Coords.), *La Dinastía de los Austria: Las relaciones entre la Monarquía Católica y el Imperio, vol. II*, Ediciones Polifemo, Madrid, 2011, pp.701-757

⁶ Smišek, Rostislav, “Quod genus hoc hominum: Margarita Teresa de Austria y su corte española en los ojos de los observadores contemporáneos” en Martínez Millán, José, González Cuerva, Rubén (Coords.), *La Dinastía de los Austria: Las relaciones entre la Monarquía Católica y el Imperio, vol. II*, Ediciones Polifemo, Madrid, 2011, pp.909-951

⁷ Nieto Nuño, Miguel (Ed.), *Diario del Conde de Pötting, Embajador del Sacro Romano Imperio en Madrid (1664-1673)*, tomo I, II, Biblioteca Diplomática Española, Madrid, 1990

スペイン語に堪能であったベッティング伯爵は1664年から1674年かけてスペイン宮廷での事柄を記した日記をスペイン語で残している。ベッティング伯爵の日記は1664年1月から始まっており、国王・王妃への謁見、宮廷人・他国大使・聖職者との会談、君主である神聖ローマ皇帝への報告、教会への参向について幅広く記されている。母国語であるドイツ語ではなく、スペイン語で日記を記録した理由については明らかではないが、この日記に掲載されている外交機密は少ないため、他者に読まれたとしても問題は無かったためにスペイン語で記述されたと推測する。

⁸ フェリペ4世の二番目の王妃で、フェリペ4世の姪にあたる。神聖ローマ皇帝レオポルド1世の同母姉である。ドイツ名はマリア・アンナ・フォン・エスターライヒ。

⁹ Nieto Nuño, Miguel (Ed.), *op.cit.*, tomo I, p.20

¹⁰ *Ibid.*, p.22

“A las cinco huue audiencia del Rey, representandolo en uoz y por papel lo que Su Magestad Cesarea me hauia encargado sobre la determinacion de la jornada de la Cesarea Nobia.”

¹¹ *Ibid.*, p.26

“Por la tarde me uisitó el Duque de Medina trayendome la resolucion del Rey sobre la jornada de la Señora Emperatriz.”

¹² *Ibid.*, p.31

¹³ *Ibid.*, p.43

“He dado un papel al Rey muy comedido sobre la jornada de la Emperatriz mi Señora.”

¹⁴ *Ibid.*, p.61

“Hable a la Reyna sobre las materias corrientes, y [de] la jornada de la Emperatriz.”

¹⁵ *Ibid.*, p.62

“Por la tarde tube una larga session y de mucha consequenza con el Duque de Medina en su casa de la Calle Mayor, sobre la jornada de la Emperatriz mi Señora.”

¹⁶ *Ibid.*, p.63

¹⁷ *Ibid.*, p.66

¹⁸ *Ibid.*, p.67

“Por la tarde a las cinco tuue una larga audiencia con la Reyna, representandola por menor lo que hauia traído el correo en la materia de la jornada de la Nobia Cesarea, animandola por orden del Emperador mi Señor para que coopere. Despues de la audiencia baje al quarto del Duque de Medina, tratando con el la misma materia largamente, y entregandole la carta cesarea.”

¹⁹ 国王付きの秘書官であり、国王との直接の協議をする権限を有していた。

²⁰ *Ibid.*, p.68

“A las tres despues de medio-dia tube audiencia particular del Rey, muy larga, representandole lo que el Emperador mi Señor me hauia encargando con su correo, en materia de la precisa jornada de la Emperatriz mi Señora para el mes de abril, dandole sobre lo mismo un papel con toda distincion. Despues de esto me fui a la Cobachuela a pasar los officios para [el] mismo intento con el don Luys de Oyanguren.”

²¹ *Ibid.*, p.69

²² *Ibid.*, p.71

²³ *Ibid.*, p.83

“El Rey nombro al Duque de Cardona por el acompañamiento de la Señora Emperatriz.”

²⁴ *Ibid.*, p.96

“Hablé allí con el Duque de Medina y [con el] Conde de Peñaranda la primera vez.”

²⁵ *Ibid.*, p.100

“El Duque de Medina me embio la resolucion del Rey sobre la jornada de la Emperatriz mi Señora, para el agosto.”

²⁶ *Ibid.*, p.122

“por la tarde me fui al Retiro a la ermita de San Juan a ueer al Duque, y conferir sobre el referido caso y de como hauia menester apresurar la jornada de la Señora Emperatriz.”

²⁷ *Ibid.*, p.122

“Di el pésame a sus Magestades por la muerte del Señor Archiduque de Inspruk, que Dios tenga, con esta ocasion hiçe nueuas y muy apretadas instancias sobre la jornada.”

²⁸ オーストリア出身の王妃マリアナ・デ・アウストリアの聴罪司祭を務めており、王妃の相談役として政治にも携わっていたが、スペイン宮廷での評判は芳しくなかった。

²⁹ ベッティング伯爵の交渉を補佐するためにレオポルド1世によってオーストリアから派遣され、1665年4月にスペインに着任した。

³⁰ *Ibid.*, p.123

“Por la tarde uino a ueerme el Padre Neithart, y el Baron de Lisola. Tubimos una muy larga conferencia sobre la jornada cesarea, y de cómo se hauia de reembiar el correo, aqui ya de muchos meses detenido.”

³¹ *Ibid.*, p.123

“He hablado al Rey sobre lo que conuiene se apresure la jornada, y esto por muchos releuantes motiuos, dandole lo mismo por escrito en un papel.”

³² *Ibid.*, p.123

“Hablé a la Reyna muy apretadamente en la materia de la jornada, dandole un traslado del papel que antes de aver di al Rey, para que Su Magestad coopere en ello.”

³³ *Ibid.*, p.124

³⁴ *Ibid.*, p.124

“Fuíme a las cinco de la tarde [a] hablar al Rey, entregandole las cartas â este fin del Emperador mi Señor, despues de que hiçe la misma funcion con la Reyna interpelando su cooperacion para la partida de la Augustissima Nobia”

³⁵ *Ibid.*, p.128

³⁶ Maura Gamazo, Gabriel, *Carlos II y su corte, tomo I*, Liberia de F. Beltran, Madrid, 1911, p.87

³⁷ Nieto Nuño, Miguel (Ed.), *op.cit.*, tomo I, p.129

³⁸ *Ibid.*, p.130

“He visto las joyas que truxo el Conde de Harrach, que son tres pieças(...)La primera es un diamante, un rubi y una perla muy grande, de mucho valor. La otra cinco esmeraldas, de muy grande tamaño, y esta son alajas y joyas vinculadas de la Casa, y se empeñan a la Augustissima Novia por 100 mil ducados. La tercera joya es el retrato de Su Majestad Cesarea guarnecido con vario genero de diamantes muy grandes”

³⁹ *Ibid.*, p.134

“Enbiome el Duque de Medina por un secretario suyo la resolucion del Rey por escrito de que la jornada de la Señora Emperatriz se declaraua para los diez de octubre. Fuíme â dar gracias al Rey de esto, y le di un papel sobre la materia de la embarcacion de la Majestad Cesarea. Declarose tambien conmigo el Rey de que queria tomar sobre si la promesa del Emperador mi Señor para el día y funcion del desposorio.”

⁴⁰ *Ibid.*, p.138

⁴¹ *Ibid.*, p.142

“Tube un papel del don Blasco de Loyola en el qual en nombre de la Reyna deseaua saber si tenia los poderes para el desposorio cesareo.”

⁴² *Ibid.*, p.142

“Bajé despues a la Couachiuela para hablar al [don] Blasco de Loyola sobre la materia de la jornada y diciendole la rispuesta que me pidió ayer sobre que ya mas de seis meses tenia los poderes para el desposorio.”

⁴³ *Ibid.*, p.143

“Tube la resolucion de la Reyna por aviso de don Blasco de Loyola sobre la jornada cesarea en que para ello se determina el mediado del mes de febrero, plega a Dios que lo que tantas ueçes se promete tambien una se cumpla.”

⁴⁴ *Ibid.*, p.148

⁴⁵ *Ibid.*, p.151

“A las quatro me llamó la Reyna â decirme de que se hauian de entregar las joyas a la Emperatriz mi Señora”

⁴⁶ *Ibid.*, p.152

⁴⁷ *Ibid.*, pp.152-153

“A las quatro de la tarde se hiço la función publica â Palacio de la entrega de las joyas de parte del Emperador mi Señor a la Emperatriz mi Señora; cuya funcion se hiço en la forma siguiente. Despues de las tres llego en mi casa el Conductor de los Embajadores, don Alonso de Paz, con dos coches del Rey, â llevarnos a Palacio. Entramos, pues, en el primer coche yo, el Conde [de] Harrach [el] Baron de Lisola, [el] Conde [de] Opperstoft, [el] Baron [de] Zweyer, y el dicho Conductor. Seiguiose el otro coche del Rey,

despues el mio del respeto sin que estuuiése nadie dentro, luego mi coche que siempre asiste al Conde de Harrach, despues el coche del Baron [de] Lisola y otros dos mios, en todo siete llenos de Gentilleshombres. Llegados â Palacio, subimos con numerosissimo cortejo a la antecamara de la Reyna. (...) Entrados en la antecámara empeçamos nuestra funcion con entrar a la Reyna, que se estubo en el Salon de los Retratos con el Rey al lado y la Señora Emperatriz, en presencia de las damas, [del] Duque de Medina [del] Marques de Mondéjar al otro lado, y del Duque de Montalto, Mayordomo Mayor, puestos con la Reyna, [que] me mando cubrirme. (...) Luego empeço [a] hablar el Conde de Harrach. Despues nos açercamos al Rey, â darle el deuido cumplimiento, y con esto nos metimos delante [de] la Señora Emperatriz nuestra Ama, a la cual el Conde de Harrach, despues [de] la deuida representacion, entrego las joyas que consistian en tres diferentes pieças: dos vinculadas de la Casa la primera de cinco esmeraldas de ecesivo tamaño, la segunda un rubi, una rosa de diamante, y una perla, cosa por su raredad de grandisimo ualor, y la tercera, que venia propia, una grande caja de retrato del Emperador mi Señor, de uarios y grandisimos diamantes, labrado al uso de hoy, admirablemente. Reçiuiolo todo Su Magestad como de quien uenían con particular señal de agradecimiento. Besamosle entrambos la mano y nos boluimos con el mismo acompañamiento, y por la misma Calle Mayor que uenimos â casa."

⁴⁸ *Ibid.*, p.167

"Vino [a] hablarme don Lucas Cortes, Guardajoyas y Pagador de la Señora Emperatriz, dándome cuenta del estado y forma de las preuenciones para la jornada."

⁴⁹ *Ibid.*, p.175

⁵⁰ *Ibid.*, p.177

"Hable a las quatro a la Reyna muy cuidadosamente sobre la jornada y materia â ello perteneciente, dandole assimismo un papel. Asegurome Su Magestad de que la dicha jornada se hauia de emprender fixamente a los 15 de março. Plega â Dios que assi se haga."

⁵¹ *Ibid.*, p.181

⁵² *Ibid.*, p.187

"Agradeçiomelo mucho Su Magestad, asegurando que la jornada se haria indubitavelmente ô â fin de este mes o â primeros de abril. Plega â Dios que la maldad se confunda."

⁵³ *Ibid.*, p.195

"se declaro Su Magestad con palabras muy espresiuas de querer absolutamente que el desposorio se haga el primer dia de pasqua, y la jornada el terçer"

⁵⁴ *Ibid.*, p.195-196

⁵⁵ *Ibid.*, p.197-198

"el felixmente desposado el Emperador mi Señor, con la Serenissima Infante doña Margarita Maria de Austria, la qual función se hiço en esta manera: el Duque de Medina [de] las Torres, como Procurador de Su Magestad Cesarea, combido â mi, a los Grandes y mayor parte de la Nobleça, â su casa, para el acompañamiento, con que llegué alla con mis quatro coches, hauiendo sido reconocido el del cuerpo el mas rico y lindo que se haya uisto en esta Corte. Despues salimos de la casa del Duque, los señores del acompañamiento primeros, despues el Duque en su coche de Napoles, cuya forma no pareçio bien, era ochauado. [Nos] esntamos en el en la forma siguiente: el Duque como nouio, yo, y el Duque de Alba, todos tres juntos delante; detras el Conde [de] Peñaranda, [y el] Duque de Pastrana y su iho. Despues de este coche del Duque se iua el mio uacio, aclamado y aplaudido de todos, luego el coche de los gentilleshombres del Duque, despues el [coche] con los mios, y assi alternatiuamente los demas. Desde la casa del Duque se empleo mas de una hora y media hasta llegar â Palacio, por el grandisimo

embaraço de los coches y gente, porque concurrio todo de seda guardainfantes. Despues entro el señor Cardenal Colonna, uestido en pontifical, con el Patriarca y el clero, y se hiço la función del desposorio en la forma y con preguntas acostumbradas. Acabado que fue, se açero la Magestad Cesarea a la Reyna y en rodillas le beso la mano, la qual la leuanto con mejor graçia y ternura que â todos pudo causar. Lo mismo hiço con el Rey, el qual no se dejo besar la mano. Luego se puso en el mejor lugar, y uino el Duque de Medina [a] besarle la mano, al qual seguia yo, entregando a Su Magestad una carta del Emperador mi Señor de agratulaçion, adonde la trataua ya como su Emperatriz y desposada. Detras de nos-otros llegaron todos los presentes â besar la mano a Sus Magestades, y conforme no todos supieron lo que se haçian, unos empeçaron con la Emperatriz, otros con la Reyna. Acabado todo esto, el Duque de Medina quiso exercitar conmigo reçiproca cortesia.”

⁵⁶ *Ibid.*, p.199

“Dia el mas dichoso en el qual se dio principio a la jornada de la Emperatriz mi Señora, despues de medio-dia a la una. El despedimiento de la madre y iha fue de las cosas mas tiernas que jamas se uieron. Su Magestad se fue desde el Palacio en passando al Conuento Real de las Descalças para despedirse, y de alla â Nuestra Señora de Atocha, adonde se junto todo el Madrid para augurar felix jornada â esta tan apreçiada joya. Yo me fui adelante siruiendo â su Magestad hasta Valdemoro, primera possada, adonde llego su Magestad a las diez de la noche. Halleme a la salida del coche acompaõando â Su Magestad hasta su quarto.”

⁵⁷ *Ibid.*, p.199

“Despedime â medio-dia de la Emperatriz mi Señora, y boluime despues â Madrid a las ocho de la tarde.”